

## キーワード

- 冷え
- 寒熱
- 附子
- 痰血

諏訪中央病院・東洋医学センター 長坂 和彦

## 問診表の臨床応用

## 冷え症：瘀血スコアの臨床応用

## 冷え性と冷え症

「ひえしょう」には、冷え性と冷え症の2つの漢字がある。現代医学は「ひえしょう」を身体が冷える性質（体質）と捉えているので、冷え性と書くことが多い。しかし、身体が冷えた状態が続くと図1のような症状をきたすことがあるので、冷え症と書くべきであろう。

図1 身体が冷えた状態が続くとあらわれる症状



## 寒熱

目の前にいる患者を温めながら治療するのか、あるいは、冷しながら治療するのかという漢方医学の考え方。痛みを主訴に来院した患者が風呂に入ると痛みがやわらぐ、あるいは、冬になると症状が悪化すると訴えた場合は、温めなければならない病態であると判断する。

唐辛子やカレーを食べると汗をかくように、食べ物や漢方薬には身体を温めたり冷やしたりする働きがある。漢方薬を使うときは、温めるべきか冷やすべきかを考えて処方する必要がある。

冷えたビールを飲むと下痢する人がいる。これはビールで消化管が冷えたから下痢すると考える。よって、消化管を温める真武湯、小建中湯、人参湯などを処方する。寒いところに出ると鼻水が出たり、尿が近くなる。また、胃腸が冷えると唾液が多くなる。このような場合も温める薬を処方する。鼻水には小青竜湯や麻黄附子細辛湯、頻尿には苓姜朮甘湯や八味地黄丸、唾液過多には人参湯や附子理中湯が適応となる。この場合、身体に冷えがあるので、鼻水、痰、尿は透明であることが多い。

一方、体に熱があると、痰や尿は黄色になる。肺では麻杏甘石湯や清肺湯、尿路では五淋散や猪苓湯、竜胆瀉肝湯で炎症を除く必要がある。

このように、冷やすべきかあるいは温めるべきかということは、漢方治療をするとき、最初に決定すべき事項である（図2）。

## 冷え症の漢方治療

冷え症は婦人の54%に見られる。冷える部位は、腰が39.9%、足が29.4%、下肢が14.5%で、腰から下が冷えやすい。冷えのパターンに応じた治療法(図3)と冷える部位

による治療法(図4)を示す。

### ●附子

附子は、祛寒作用(温める)、利水作用、鎮痛作用があり、冷え症や疼痛疾患に用いることが多い。真武湯エキスや八味地黄丸エキスには、あらかじめ附子が加えられて

いるが、量が少ないので修治附子末や加工附子末を1日あたり2~8g 加えることが重要である。また、温める薬はお湯で服用することを指導する。

処方例：八味地黄丸エキス6 g + 修治附子末4 g

図2 漢方治療にあたり最初に決定すべき事項

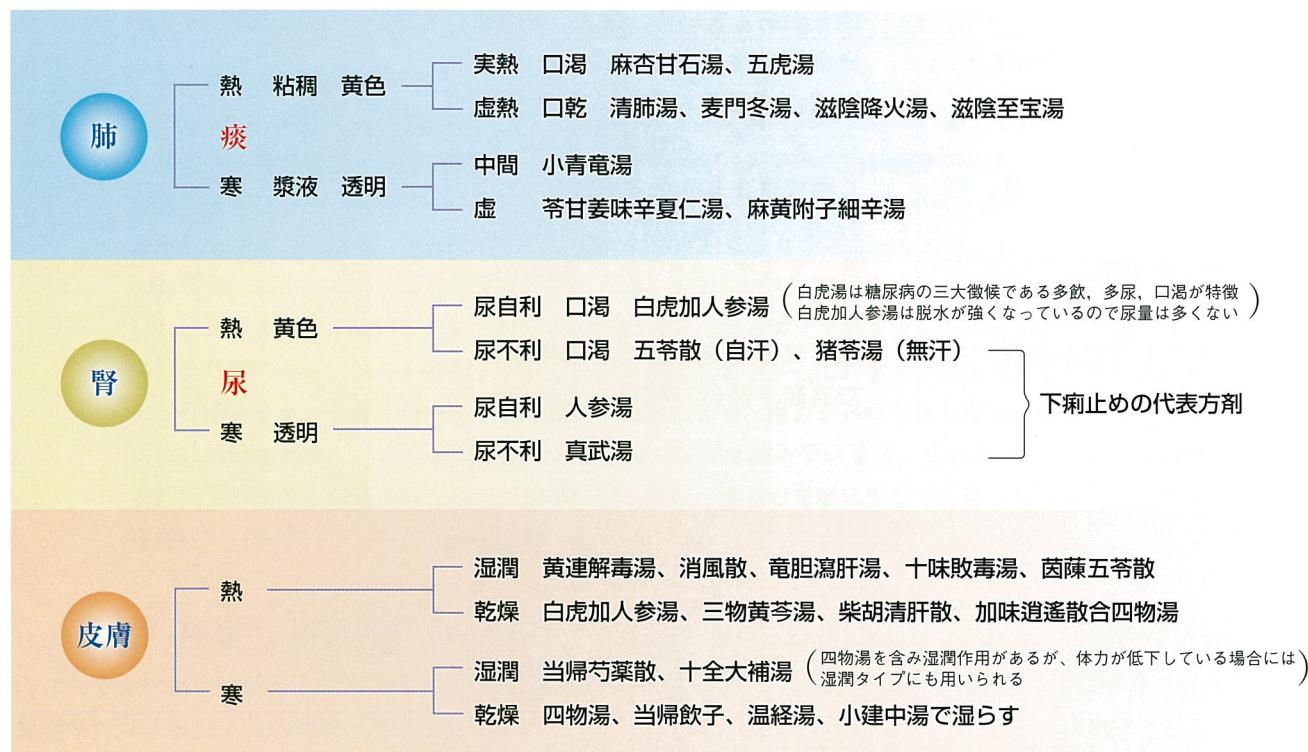


図3 冷えのパターンに応じた治療法



図4 冷えの部位による治療法



**症例1：66歳 男性 左半身のしびれと左不全麻痺**

**現病歴：**1998年8月22日、脳梗塞による左片麻痺で2ヵ月間入院した。リハビリ療法等でやや改善したが、左不全麻痺としびれは残ったまま退院した。1999年6月8日、当科初診。内科でニルバジピン、塩酸ラニチジン、塩酸チクロピジンが処方されている。

**和漢診療学的所見：**

**自覚症状：**2時間ごとの頻尿と3～4回の夜間尿がある。腰から下が冷える。

**他覚症状：**皮膚枯燥、細絡、痔がある。

**脈候：**虚実中間で弦。

**舌候：**やや紫色。腫大、歯痕、縦裂があり中等度の黄苔で覆われている。

**腹候：**腹力中等度。軽度の腹直筋の攣急と臍傍圧痛、臍下不仁を認める。

**経過：**夜間尿、腰以下の冷え、臍下不仁は腎虚の所見で、八味地黄丸や牛車腎氣丸が用いられる。丁や岩崎らの報告によると、八味地黄丸は脳血流を増加させる働きがあるという。また、紫舌、皮膚の枯燥、細絡、痔、臍傍の圧痛は瘀血を示唆する所見である。そこで、八味地黄丸エキスと桂枝茯苓丸エキスを処方した。2週後の再診時には、しびれが改善てきて、9月下旬には消失した。

筆者は脳梗塞の予防や脳梗塞後の再発予防に桂枝茯苓丸を用い

ている。桂枝茯苓丸には、血液粘度低下作用、赤血球集合能改善作用、赤血球変形能改善作用、フィブリノーゲン低下作用、血管内皮依存性弛緩作用、動脈硬化抑制作用がある。瘀血スコアは、37点から27点に改善した。

**症例2：30歳 女性 生理痛、下腹部痛**

**現病歴：**1995年4月頃より生理痛が強くなり、婦人科を受診したところ、冷えによる生理痛といわれた。1996年6月チョコレート嚢腫の診断を受け、偽妊娠療法を行った。1998年4月急性腹膜炎の診断で婦人科に入院したとき手術を勧められた。1998年6月1日当科初診。

**和漢診療学的所見：**

**自覚症状：**体がだるく重い。肩がこる。冷えのぼせがある。咽、胸、心窓部がつまた感じがある。腹部膨満感がある。職場のストレスが多い。生理痛が強く、生理の時以外も下腹部痛がある。下腹部の痛みで目が覚めることがあり、お風呂に入りお腹を温めるとよくなる。

**脈候：**やや沈、やや弱。

**舌候：**淡白で、薄い白苔で覆われている

**腹候：**腹力中等度。心下痞鞭、胸脇苦満、臍傍圧痛がある。下腹部は痛みのため、ほとんど押すことができない。

**検査：**当科受診前CA-125は400U/mLを越えていたが、79→38U/mLと改善した。エコー、MRI検査で下腹部に直径5cm大的massを2個認める。

**経過：**折衝飲(桂枝茯苓丸と当帰芍薬散を合方したような方剤)加附子1gで徐々に腹痛が改善した。2000年9月から芎帰調血飲に転方にし、2002年2月から芎帰調血飲エキスに変更した。芎帰調血飲は、

駆瘀血剤に、理気剤、補氣剤がバランスよく配合されていているので、本例のようにストレスや腹満を訴える場合は使いやすい。瘀血スコアは、47点から21点に改善した。